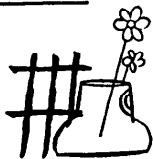


巻頭言



欧文誌の役割について

上村 務†



情報処理学会の欧文誌 JIP (Journal of INFORMATION PROCESSING) は、大きな問題をかかえている。現在、発行部数は約 1,900 前後で、会員の割合にすると 16 人に 1 人の購読になる。購読者のほとんどが、会員の約 3 割を占める研究者だと仮定すると、研究者 5 人に 1 人の購読ということになる。この数字はそう悪くないとも思えるが、深刻な問題は海外の購読部数がわずか 70 前後と極めて少ない点である。これでは読者の 95% 以上が国内の読者ということであり、欧文誌が何のために存在しているか疑問視されて当然となる。こうした事情は投稿論文にも影響し、それがまた購読部数を抑えるといった悪循環になっている。

周知のように、日本のコンピュータ技術に対する海外での関心は非常に高い。例えば、アメリカではテレビや新聞等で毎日のように日本の技術について報道され、一般家庭においても関心は高く、種々の出版物による日本の技術の特集や翻訳サービスなどが行われている。しかしながら、定期刊物物として日本を対象にした学術誌の普及は限られており、JIP のような日本を代表する学会による学術誌が重要な役割を果たせる状況が存在しているように思える。

私は JIP の編集に携わってからまだ 2 年余りであるが、JIP を取り巻く環境は厳しいことを感じている。確かに JIP の役割を日本の情報処理技術の海外への紹介と位置づけるのは正しいのであろうが、このことをもっと深く掘り下げて考えてみる必要があるのではと感じている。

JIP の海外の購読が少ないのは一つには PR 不足がある。しかし、いざ PR しようとするところ容易ではない状況に直面する。学会自身が海外のコンピュータ研究者・技術者に関する情報をほとんど持っていないし、そうした情報を蓄積し活用するリソースも経験も不十分である。更にもっと重要なことはそもそも JIP

が紹介すべき日本の情報処理技術とはどんなものなのかという点である。国際化とは我々自身の活動の基本を見直して、世界の情報処理の分野において我々がどのような貢献をするかが問われることなのであろう。ちなみにアメリカでは国際化という言葉はあまり耳にしない。アメリカによる情報処理技術への貢献は絶大なものがあり、彼らは常にアメリカ=世界という図式を用いている。またイギリスも学術面では大きな貢献をしており、理論計算機科学を中心にしっかりしたアイデンティティが確立されている。日本は確かに多くの実用技術において優れているが、それらを総体的に見た場合、日本の創り出したもので独創的かつ普遍的に通用するものはどんなものかといえるだろうか。日本はこれから学術面でも貢献をしなければならないと言われるが、優れた実用技術を生かして学術的な貢献をするにはどんな分野でどういう形で行うのが有効であろうか。これらは我々が長期に渡って模索する努力をし、解答を示していかなければならないものであり、JIP のような出版物はこうした努力を内外に対して公表し、更に推進する役割として位置づけられることができよう。

最近では多くの学術専門誌や国際会議があり、そうした場で成果を発表すれば十分であり、すでに評価が確立している場での発表の方が本人の業績の評価も高くなるという考えは強いと思う。しかしながら種々の場で発表される個々の論文だけでは、日本のコンピュータ技術の基盤や動向、背景などの全体像は表現されにくいと思う。しかしこうしたものが我々の活動の基本であり、ひいては技術的アイデンティティの形成の源になるのだと思う。JIP のような学術誌にはこうした認識を具体的な内容を通して更に推進していく役割が期待できる。このためには、編集や企画、PR など我々担当者の課題は多いのであるが、最終的な役割の実現はやはり一人一人の研究者、技術者にかかっているのだと思う。(平成 2 年 5 月 15 日)

† 本会理事 日本アイ・ビー・エム(株)東京基礎研究所